



企業と人間

父の想い出

宮内義彦

miyouchi yoshihiko

人は年齢を重ねるとともに徐々に記憶力が衰えていく。特に直近のことは忘れやすく、鮮明に覚えているのは昔のことで、子どもの時のことなどは何十年経っても生き生きと思い出される。

私にとっての子ども時代は、まさに日本が歴史上、最も苦しんだ時期である第二次世界大戦の最中であった。日本が泥沼の戦争に入り、それが完全に崩壊した敗戦、その後の世の中の激しい移り変わり、子どもの時の体験とはいえ、その厳しい世相は忘れることができない。当時、私をはじめ家族全員を守ってくれた父母のことが思い出されるとともに、

両親の行動から大きな影響を受けたことも当然の帰結なのだろう。

わが家は神戸にあり、父は、戦前多くあった外国商館といわれる外人経営の貿易会社に勤めるサラリーマンであった。しかし、戦争が間近に迫って米国との貿易は難しくなり、父が勤めていた米国の商社も店を閉じて帰国することになった。今思うと、そこで失業し、やむなく新しい職場を探したようだ。父は取引先の一社であった神戸市内の材木会社で働くことになり、間もなく太平洋戦争へと突入していく。

父は何かの折に東京に出張し、非常に早い時期の空襲を体験したため、神戸も危ないと考えて、まずは家族の中の最長老であった父の母、すなわち私の祖母と、最年少であった国民学校（現在の小学校）二年生の私とを遠い親戚を頼って山口県に疎開させた。私の通う国民学校では、初めての縁故疎開（空襲が激しくなるとともに学校ごと疎開したのを「集団疎開」という）であり、転校した山口県の漁村の学校にとっても初めての疎開児童の受け入れだったようである。遠く列車を乗り継いで二人を送ってきた母が、夜汽車で神戸に帰るのを駅頭で見送った時は、子ども心にももう会えないのでは、と不安でいっぱいだったことを思い出す。その後の日本は負け戦の連続で、それから一年くらいに、ほとん

どの大都市が空襲に遭うという厳しい時代に入った。しかし私はその間、両親の配慮のおかげで、祖母と共に寂しくはあったけれども、安全面では不安のない生活を送ることができた。

一方、父の勤めていた会社が軍需産業であったことから、軍の命令で工場ごと疎開することになり、わが家にとって何のゆかりもなかった兵庫県と岡山県の県境にある兵庫県佐用郡佐用町というところに、海軍御用達の隔離板（電流を遮断するための合板）工場を建設することになった。当時としては佐用町の大産業であったろう。盛時には、おそらく数百人を雇用する工場が短期間で建設されていた。父がその工場の責任者となり佐用に移ったため、私たちも山口県をあとにし、その工場近くにあった農家の蚕小屋を改造した家で、ようやく家族揃って暮らすことになった。それはもう敗戦間近の頃であり、日本の敗色は誠に濃く、大都市にB-29の大編隊が毎夜のように空襲していた時期であった。疎開生活では食料確保が一大事であり、インフレ経済のもと貨幣価値が下落し、物々交換が日常であった。わが家のカメラ、着物、あるいは時計などといったものが、徐々に米などの食料に化けていく光景もたびたび目にしたものである。

さて、田舎町に突然建設された軍需工場では、山から伐採した木材を薄くむいて、これを重ね合わせて合板を作っていたが、今にして思えば、それは極めて労働集約的な産業だった。いつの頃からか工場では、おそらく軍から割り当てられたのである朝鮮から来た若者たちが働くようになった。十余名はいたのではないかと思うが、彼らは集団で工場横の小屋に住んでいた。父親は帰宅すると、時々「彼らは本当にかわいそうだ。厳しい生活をして腹を減らしているのに、皆、非常に手荒く扱い、働かないといって殴ったりする。本当にひどいことをするものだ」と嘆いていた。当時の世相では、たとえ工場長の立場でもそういう暴力を直接止めることはなかなかできなかったようである。父はこういった出来事を最も嫌う性格であったため、大いに心を痛め、また何とかしなければと考えていたのではないかと思う。

ある日、わが家で家族六名が薄暗い電燈のもと、いつものように何も無い貧しい夕食を終えたところで、父が「何か食べるものはないか」と母に尋ねた。母は家にある野菜などの食料をできるだけたくさん包みに入れ、「これで全部ですよ」と父に手渡した。父は「義彦、いっしょに行こう」と言って、私を連れて夜道を歩き、工場横の朝鮮から来た若者たちの小屋まで行った。とても薄暗い光の中で、薪を燃やし暖をとっていた若者たちは、工場